

なぜホメオパシーと減感作療法で花粉症が治らないのか？

最近、アトピーの治療で、「レメディー」というものを砂糖にまぶされた訳の分からない錠剤を飲まされ、やればやるほど症状がひどくなってどうにもならず、当院を受診された患者さんがいます。この治療をホメオパシーというらしいのです。私は実は以前からホメオパシーについて詳しく書きたいと思っていたのですが、実際にレメディーという薬を飲んできた患者さんに出会ったのでさらに興味がわいたので、本格的に免疫学の理論からホメオパシーの真実を明らかにしましょう。さらに減感作療法という花粉症の治療も、実はホメオパシーと似たり寄ったりなものであることを論証しましょう。

ホメオパシーは、類似療法とか同種療法と訳せます。ホメオパシーは、1796年にドイツの臨床医であったハーネマンが名付けた療法であります。ホメオパシーは「病気の症状と最も良く似た症状を引き起こす薬物を患者に投与すると病気を治すことができる」という曖昧模糊としたハーネマンの経験を利用した民間療法であったのですが、これを体系化して医学の治療法のひとつに組み入れたのです。もちろん大量に同じ症状を引き起こす薬物を入れると死ぬことがあるので、希釈したうえで少量ずつ投与することによって患者の自然治癒力を呼び覚まそうとする民間療法に毛の生えたやり方であり、ます。ただ現在でもヨーロッパ全域やアメリカ、インドなどで最も支持を得ている民間療法の一つであるようです。1796年は、ちょうどイギリスのジェンナーが人の天然痘に対して牛痘を始めた頃であります。ハーネマンが1796年に創始したといわれるホメオパシーの原理は今なお免疫学から明らかにした人が誰もいないので、私がホメオパシーの意味を説明してあげようという気になったのです。ハーネマンもジェンナーも、免疫のイロハの「い」も知らなかった人たちであったので、200年以上経った免疫学の進歩を身につけた私が彼らを批判するのは“酷の骨頂”ではありますが、ハーネマンのホメオパシーの本質を批判的にこれから解説していきたいと思えます。

昔も今も、病気には肉体の病気と心の病気があります。まず肉体の病気というのは、人体に入った異物が病気の原因であります。この異物は5大栄養素と水と酸素と共に、知らぬ間に入り込んだウイルスであり、細菌であり、カビであり、天然の化学物質であり、人工の化学物質であります。昔から病気は、ウイルス・細菌・カビなどの病原菌から生ずる感染症と、化学物質によるアレルギーの2つしかなかったのです。このふたつの肉体の病を治すのは免疫の遺伝子だけであり、治し方は4つしかないのです。異物を殺すか、共存するか、排除するか、神経節に押し込めるかの4つです。もちろん肉体の

病気以外に心の病があります。心の病気の原因は心に侵入する異物であります。心の異物というのは、自分の思い通りにならない状態をいいます。ついでに書けば、心の病気は、その異物を受け入れる以外にはないのです。この受け入れるということが、実は一番大変ですが。以上述べたことが、人間の病気の全てについてのシンプルな真実であることを十分に理解しておいてください。これを前提として話を進めていきます。まずホメオパシーの **Wikipedia** をコピペしながら、ハーネマンの考え方を批判していきます。

マラリアの治療薬であるキニーネをハーネマン自ら飲んだところ、マラリアそっくりの症状が(キニーネの重篤な副作用にマラリアの黒水熱に似た症状がある)出たことが、この理論を考案するきっかけとなったという。(黒水熱というのは、マラリアの経過中に強度の血色素尿や悪寒戦慄や高熱や黄疸を呈することです。)ハーネマンの主著『オルガノン』(1810年刊)によると、彼は「類似したものは類似したものを治す」という「類似の法則」を発見し、ある物質を健康な人に投与した時に起こる症状を治す薬として、その物質そのものが有効であると彼は考えた。(ハーネマン自身がマラリアになっていないのに、キニーネを飲んで黒水熱に似た症状になったからといって、類似したものは類似したものを治すという論理は100%飛躍しています。つまり理屈が合いません。しかもどうして同じ症状が出るかという理屈については一切言及していません。答えは実は簡単なのです。マラリアの原因はマラリア原虫であり、このマラリア原虫を排除しようとする免疫の働きと、異物であるキニーネを処理する免疫の働きが同じであるから同じ症状が出たに過ぎないのです。キニーネはキナの木の新皮から作られるアルカリ性の苦みのあるアルカロイドであります。これらマラリア原虫とキニーネは免疫にとっては共通の抗原性があるのです。従ってマラリアと戦っている人にキニーネを入れるとさらに免疫が高まって、マラリアを殺しやすくなるのです。キニーネには解熱作用や子宮収縮作用などもあります。私は以前、「漢方薬は人体にとって異物になっているので、免疫がそれを排除しようとして免疫を上げることができる働きも持っている」と書いたことがあります。キニーネがその働きを持っている一例であります。ついでにキニーネに含まれるアルカロイドというのは一体なんなのかについて説明を加えておきましょう。

アルカロイドは植物塩基と呼ばれ、主に植物が作り出す窒素を含む複雑な塩基性有機化合物の総称であります。皆さんご存知のタバコのニコチンや、コーヒーのカフェインや、マオウに含まれているエフェドリンや、コカの木に含まれているコカインや、芥子(ケシ)の実に含まれているアヘンから取り出したモルヒネや、原始人が狩猟に用いた

ツヅラフジに含まれているクラーレなどがアルカロイドの代表です。アルカロイドは少量で毒作用や感覚異常などの特殊な薬理作用を持っています。

結論から言うと、結局ホメオパシーというのも、漢方と同じく患者の免疫をレメディーによって上げさせて、患者に病気を治させているのです。免疫を上げる方法はふたつしかありません。ひとつは今述べたように、人体に異物が入るときであり、もうひとつは異物が入った時に人体が作る免疫のタンパク質と同じものを入れるかのふたつしかないのです。ここのところが少し理解しにくいかもしれませんので、さらに説明しましょう。言い方を変えましょう。病気は異物を免疫が認識することから始まります。つまり異物が人体に入らない限りは認識しようがないのです。次にこの異物を処理するために免疫の働きにより、敵をやっつけるための様々なタンパク質が作り出され、最終的には敵を殺し、排除し、共存し、神経節に押し込むという答えを出してくれるのです。もっと具体的に説明しましょう。

敵を最初に認識するのは様々な細胞たち、大食細胞であり、樹状細胞であり、好中球であり、リンパ球などが異物を認識して初めて戦い、つまり病気が始まるのです。次に異物を処理するため、上に今挙げた細胞が作り出す様々なタンパク質、つまりサイトカインやケモカインや生理活性物質や様々な受容体が、これらの細胞たちが持っている遺伝子の命令によって作り出されます。このようなタンパク質を外から補充してやれば、戦いが早く終わるのです。このような2つの仕事をヘルプしてくれるのが植物の作ったアルカロイドという植物塩基であるのです。

それでは、レメディーの中身は一体何なのでしょう？漢方のアルカロイドなのでしょう？それとも他の物質なのでしょう？レメディーについては後に詳しく書かれていますから、そこで再び検討しましょう。）

さらに、その物質が限りなく薄く希釈震盪される（ハーネマンの表現を借りれば「物質的でなくなる」）ほど治癒能力を得ることが出来ると考えたのだ。（肉体の病気は物質である異物で起こり、病気を治すのはその異物を殺すか、共存するか、排除するか、神経節に押し込めるしかないので、「物質的でなくなる」という言葉は文学です。ひょっとしたら呪術の世界かもしれません。アッハッハ！ハーネマンは出発点から考え方が論理的ではありません。つまり間違っています。免疫の意味を知らなかったハーネマンにとっては当然のことです。免疫が分からなかったのも、彼は治癒能力という言葉を使っています。今も免疫学を知らない人は、「自然治癒力」という言葉を頻繁に使っていますが。）ギリシア語で「同じ」を意味する言葉と、「苦しむ」を意味するの合成語として「ホメオパシー」という語を造語した（ホメオパシーの対義語として、一般的・伝統的な医療を「異なる」を意味する言葉と、「苦しむ」を意味する言葉を合成した「アロパ

シー」(allopathy) という用語で呼ぶことがある)。これが、ホメオパシーの起源である。ハーネマンの死後、ホメオパスたちは二分した。(ホメオパスとは、ホメオパシーを使って治療する人たちのことです。) いわゆる「低効能派」は希釈震盪度を濃くしたレメディーを患者に投薬し、「原理派」はあくまでハーネマンの主張通りの薬効を主張している。(レメディーは英語で **remedy** と書き、治療薬と訳せます。従ってホメオパシーはレメディーという治療薬を用いて行われるのです。ある病状を引き起こす成分を、そのままでは有毒であるので、水によって極めて高度に希釈震盪したものを砂糖に染み込ませたものです。例えばマラリアに対して同じ症状を起こすキニーネを薄めて砂糖に染み込ませたものがレメディーであります。ハーネマンの死後、ホメオパスの人々が対立したのは、ホメオパシー自身が真実でなかったからです。真実は常に唯一であるべきであります。ホメオパシー自身が矛盾を含んでいたからです。) 現在、ホメオパシーには大別して「クラシカル」と「プラクティカル」の2派があるといわれ、前者はハーネマンの理論を重視して、症状にふさわしいレメディーを処方する。一方後者は、複数の1970年頃にハーネマンの理論を見直す動きから生まれたとされるが、複数種のレメディーの処方を推奨している。(複数種のレメディーの原料についてはすぐ下に書かれています。)

ナチス・ドイツ時代には、ホメオパシーは新ドイツ医学の一角をなすものとして期待され、総統アドルフ・ヒトラーにより厚遇された。1937年にはオカルト好きの副総統ルドルフ・ヘス、親衛隊長官ハインリヒ・ヒムラーらも出席して、ベルリンで第一回国際ホメオパシー学会が開かれた。しかしながら、その後の研究で、いくらデータを集めても偽薬効果としか出ず、ダッハウのユダヤ人強制収容所で行われた人体実験(マラリア、敗血症)でも敗血症患者はすべて死んでしまった。(ユダヤ人強制収容所の代表は、アウシュビッツが一番有名であります。ダッハウ、トレブレンカ、ビルケナウ、ザクセンハウゼン、マイダネクなどで数百万人のユダヤ人が殺されました。優れたユダヤ人に対する嫉妬に狂ったナチス・ヒトラーは、直接ユダヤ人をガス室で殺しただけではなく、ダッハウではマラリアをはじめとする様々な感染症の人体実験をもやっていたのですが、ホメオパシーで治る訳はなく、最後はさきほど述べた敗血症で全て死んでしまったのです。ホメオパシーで治りそうなのは、アレルギーしかないのです。しかも大量にアレルギーを入れたり、毒性の強いアルカロイドを含んだ薬草を入れすぎると、アレルギー反応によりショック死したり、毒死することがしばしばあったので、その怖さに気づいたハーネマンは、レメディーの濃度をできる限り薄めざるをえなかったのです。物質でなくなる程度にまで。この考え方を引き継いだのが、アレルギーの減感作療法なのです。減感作療法については下に詳しく説明しましょう。) このためホメオパシー

への関心は下火となった。当時のデータはドイツが敗戦したため書類庫の片隅に埋もれ、最近まで顧みられることはなかった。

レメディーの素となる希釈物

ハーネマンの理論を踏襲した現代のホメオパシーは、ある病状を引き起こす成分をそのままでは有毒であるので水によって極めて高度に希釈震盪したものを砂糖に染み込ませる。(例えば、アトピーを起こす食べ物に含まれる化学物質や、花粉症を起こす花粉が運ぶ PM2.5 を砂糖に染み込ませたものがレメディーになるわけです。これはまさに減感作療法と同じであります。) 希釈震盪の度合いは様々であり、10 倍希釈震盪を 9 回繰り返したものを 9X、100 倍希釈震盪を 200 回繰り返したものを 200C などと表現する。最もよく用いられるのは 30C、すなわち $100^{30}=10^{60}$ 倍に震盪しつつ薄めたものである。これがいわゆるレメディーである。希釈震盪の度合いは、通常の科学的常識に反し、繰り返して薄めたものほど効くとされる。(「効く」というのは、一体何かについてホメオパスの人たちは語りません。現代の医療と同じく、免疫を抑えて症状が出なくなることであるのか、免疫寛容を起こすことで異物と共存するのかについても一言も口にしません。) あまりにも薄めてあるため原成分は 1 分子も残っていない可能性が高く、科学的にはそれはただの砂糖玉であるが、ホメオパス達もそれを否定していない。レメディーのもとになる原成分としては、各種の薬草、鉱物などが多い。(ここが問題点です。レメディーの原料は様々な薬草や鉱物であるのです。薬草の中には先程述べたように様々なアルカロイドが含まれています。鉱物には様々なミネラルが含まれていますから、これらのミネラルと結びついたキャリアタンパクの複合体に対して患者はアレルギー反応を起こしているのです。薄めすぎてレメディーの成分が 1 分子も残っていないとすれば、何もしていないのと変わりません。呪術師が患者の手を触ったり、祈ったり、踊ったりするのと何も変わりありません。つまり元の病気は全てアレルギーであります。結局は患者さんの免疫で、そのアレルゲンを排除し尽くしてしまっているか、免疫寛容を起こして共存しているかのどちらかであるのです。)

レメディーは、すでに現れている症状の治療目的に使われることもあるが、本格的な「治療」に当たっては、表面に表れた症状よりも、その病気を引き起こした根本的な原因を「治療」しようとする。このために、レメディーの服用にあたっては「ホメオパス」と呼ばれるホメオパシー「治療」を専門に行う者の処方による。ホメオパスになるためには数年の訓練が必要とされ、そのための専門のスクールも存在する。ただし日本のホメオパシースクールは修学期間が 4 年と銘打たれていても、実際には週末のみしか授業を行わない、自宅学習の日数が含まれる等実質的な授業時間が短い場合も多々ある。

このようにレメディーの元となる薬効成分は多くの場合極めて高度に希釈震盪されており、元となる物質は1分子も含まれていないが、そこには元となる物質の「オーラ」や「波動」、「パターン」、あるいは「水の記憶」が染みこんでいて、1分子も含まれていない毒物（成分は1分子も含まれていないためリスクは全くない、という）の「パターン」や「波動」に対する体の抵抗力を引き出すことにより、自己治癒力などが高まるとする。ホメオパシーのレメディーが効くかどうかは波長が合うか合わないかで決まるので、本質的には必要な波の影響しか受けない。それゆえホメオパシーのレメディーは必要な時にしか効かず、健康体の人にレメディーを処方しても何の効果もない。ある病気の人に適切なレメディーを処方した時のみに効果がある。このため副作用のない最良の療法であるとされる。ただ、希釈震盪濃度を変えずに毎日多量のレメディーを飲み続けると、危険で重大な影響が起こるとハーネマンは注意している。（人間にとって異物であるレメディーを長期に飲ませると、体内に異物が溜まることによって、新たなる異物に対して免疫の働きが強まり、新たなる病気が出ることを経験的にハーネマンは知っていたので注意したのでしょう。結論から言うと、ハーネマンは医学の原理、つまり免疫の原理を全く知らないで、何となく思い込んで屁理屈をつけて作り上げた、とんでもない医療といえます。ただしハーネマンのやったことは免疫を抑えるということをやっていなかったという意味では、現代の医療よりも被害が少ないと言えます。アッハッハ！一方では、極度に薄められたアレルゲン（抗原）である異物を入れ続けるのは無駄の極みといえます。異物が入らない限り病気は起こらない訳ですから、ハーネマンは新たに病気を作る術に秀でていた人ともいえるかもしれませんね、アッハッハ！ハーネマンという人物は免疫学が全く知られていなかった時代の所産といえます。

一方、免疫学を全く知らなかったジェンナーも18世紀の終わりから19世紀のはじめにかけての時代の所産といえますが、彼のワクチンは原理を知らずしてたまたま的を突いていたといえるでしょう。ところでジェンナーについても常に不思議に思うことがあります。おそらく天然痘で死んだ子供の膿をこっそりと別の子供達に接種したのではないかと考えています。その結果、どうなったかについて彼は一言も述べていません。なぜ牛痘が人間の天然痘のワクチンとなり、天然痘になった人間の痘がワクチンにならなかったのかについても彼は公表していません。彼は必ずやっているはずなのですが、しかし牛痘でなく人痘をやれば感染が起こるということは知っていたのでしょう。彼ほど優秀な人間が人痘と牛痘の違いについて考察しなかったわけではないからです。これほど進んだ現代の医学でさえ、分子遺伝学的に人痘と牛痘の違いを完璧に説明しきれないのですが。）

またオルガノンの 273 段落で書いているように、レメディは同時に一種類しか使用してはいけないとハーネマンは主張している。「治療の際、一度に二つ以上の、二種類以上のレメディを患者に使用することは決して必要のないことであり、それゆえそうするだけでもすでに許しがたいことである。十分に知られたレメディを一度に単一のレメディ（注）だけ処方することが、それより多く処方することよりも自然にも道理にも適っているだろうか、という疑問をさしはさむ余地すら少しもありえないことがわかっていないのである。唯一真なる単純な医術でもあり、唯一自然に適った医術でもあるホメオパシーでは、二つの異なったレメディを一度に服用させることは、決して許してはならないことなのである。」（この言葉も全く医学的には根拠のない言葉です。ひとつのレメディではよくて、2つ以上ではなぜ駄目かについての根拠も語られていません。この台詞も思い込みと命令口調だけであり、科学の言葉ではありません。おそらく彼は2つのレメディを患者に使うことによって、とんでもない新たな病気を作って殺しかけた経験があるからでしょう。つまり、彼の医学が専ら個人的な経験に基づいたものであり、普遍性がないのです。つまり免疫学の原理が全くないので、仕方のないことでしょう。）

ホメオパスは人が健康なら体も健康という基本的な考えの元に働きかけ、心理的、感情的、精神的な状態に適合したレメディを処方する。このため、ホメオパスとのセッション（面会）では、十分な時間(2 時間程度の事が多い)をかけ、患者の心理的、精神的な状態や、成長の過程、とくに過去の大きな問題についてのインタビューが持たれる。そうして基本的な人のタイプを見て、現在の問題を判断しレメディが処方される。(最後の結論を言いましょう。ホメオパシーは語るに落ちる医学だということです。)

先程述べたように、ホメオパシーと減感作療法は同じものであるということを説明するために、減感作療法の Wikipedia をコピペして批判的に解説しましょう。

アレルギー免疫療法、つまり減感作療法においては、希釈したアレルギー（アレルギーワクチン）を主に皮下に投与する。現在では、皮下投与の他に、舌下投与も試みられている。(アレルギー免疫療法という言い方は極めて曖昧です。アレルギー免疫療法という名前を最初に付けた人は、アレルギーを入れ続けるわけですから、免疫がこのアレルギーに反応しているという意味でつけたのでしょうか。しかしながら、既に症状が出ている人に、同じアレルギーを入れることによってどのような目的を持って行われているかが明らかでないから曖昧なのです。さらにこの療法によって何が起るかについて一言も語られません。一方、従来抗アレルギー剤や抗ヒスタミン剤を投与するのも、実

は免疫療法と言ってもよいのです。この場合の免疫療法は、免疫を抑えるという意味ですから、同じ免疫療法という言葉がまるで相反することになりますね。ですからアレルギー免疫療法を正しく言えば、アレルギー投与療法というべきなのです。さらにアレルギー投与療法は別名、減感作療法ともいわれますが、この減感作療法の意味は下で説明されているので、そのときにコメントしましょう。

減感作療法で用いるアレルギーをアレルギーワクチンという言い方がまず間違っているということを指摘し、その理由を述べておきましょう。ワクチンは全ての人知っている医学用語ですが、実はワクチンの正しい意味を理解しておられる人はほとんどいません。医者さえワクチンの正しい意味を知らない人が多すぎるので説明しておきましょう。なぜならばワクチンといえば、一般大衆は全て良いものだと思込んでいますから、ここで正しておかないとますます医療が混乱し、製薬メーカーが悪事をする可能性が高まるからです。広辞苑に載っているワクチンの説明も不十分極まりないものです。まず広辞苑のワクチンの説明は次のようです。『牡牛の意味のラテン語である **Vacca** からでた言葉です。免疫原(抗原)として用いられる各種感染症の弱毒菌や死菌、または無毒化毒素のことです。これらを生体に接種すると抗体を生じさせます。死菌ワクチンとしてはチフス、インフルエンザ、ポリオがあります。生ワクチンとしては、**BCG**、麻疹、ポリオなどがあります。トキソイドはジフテリア、破傷風などがあります。以上3種類のワクチンがあります。』と書いてあります。しかしこの書き方では、赤ちゃんに何回も痛いワクチンを接種させねばならない理由がはっきり分かりません。それでは私の定義を教えてください。『感染症を起こす人間の敵である病原菌を弱めて人体に投与しておく、未来において本当の強い病原菌が人体に侵入しても、その病気が起こらないようにしてくれます。その理由はワクチンによって病原菌を殺す武器である抗体がすぐに作れるようになっているからです。』これが一番分かりやすい定義です。

それではアレルギーワクチンという言葉がなぜ間違いであるかを説明しましょう。アレルギーが起こるのは、既に抗体ができてから生じるのです。にもかかわらず、新たに抗体を作るためにワクチンを入れるというのは、さらにアレルギーの症状を強めるだけです。治療の意味をなさないのです。従ってこのアレルギーワクチンは、新たなアレルギーが入ってきた時に、アレルギー反応が起こらないようにさせることはできないのです。

またさらにもう一つ身近な意味のないワクチンについて説明しましょう。近頃、水痘帯状ワクチンを幼児に勧める医者が多くなってきました。この水痘帯状ウイルス(**VZV**)は一度感染してしまうと、この**VZV** ウイルスは殺し尽くされる前に神経節に隠れてし

まうので、殺しきることができないのです。抗体を作っても殺しきることができないウイルスに対してワクチンを作る意味が一体どこにあるのでしょうか？もちろんワクチンを打てばワクチン製造メーカーが儲かり医者も儲かるから、水痘帯状ワクチンを勧めるのですね。ワッハッハ！痛いワクチンをする目的は、あくまでも抗体を作りやすくして二度と病気にかからないためであるということをお忘れ下さい。この2つの目的が達せられない限りはワクチンと言うべきではないのです。）

多くのアレルギー疾患の治療が対症療法的であるのに比して、アレルギー免疫療法はアレルギー疾患の作用機序に働きかけ、根治を目標に治療が行われ、費用対効果の高い治療法であるといわれ、注目されている。（私のアレルギーに対する治療は対症療法ではない、世界で唯一の治療法です。対症療法というのは免疫の働きを抑える療法であります。私のアレルギー治療法も膠原病の治療法も、全て患者の免疫を手助けして、患者自身がそのアレルギーに対して自然後天的免疫寛容を起こせば、そのアレルギーと共存できるのです。つまり患者さん自身が自分の免疫で治してしまう治療法であるのです。この Wikipedia の説明も、口先では「根治を目標に」と書かれていますが、どのように根治するかに関しては一言も書かれておりません。しかもその後ろに「費用対効果の高い治療法であり注目されている」と書かれているだけで、どのように費用対効果があるかについても一言も触れられていません。残念です。現代の医学は全てこの程度なのです。）

舌下減感作療法は、現在治療研究がなされており、在宅治療の可能な、安全な治療法への展望も見せている。（アレルギーを舌下に入れようが、食べさせようが、注射しようが、アレルギーを人体に入れ続けることによってなぜ治るかについて一言も書かれていません。一言「アレルギーが入り続けると、最後は自然後天的免疫寛容を起こすから治るのです」と書き加えてもらえば良いのですが、減感作療法のあらゆる書物には、一番大事な治る原理である「自然後天的免疫寛容」という言葉は一言も書かれていません。残念です。この免疫寛容を起こすために無理やりアレルギーを入れる必要はないのです。既に毎日入り続けているアレルギーに対して苦しんでいる患者に、なぜさらにアレルギーを入れる必要があるのですか？免疫を上げる漢方煎剤や漢方の塗り薬を用いて症状をできる限り軽減させて免疫寛容を患者自身の免疫に起こさせて、患者さん自身がアレルギーを治してくれるのです。）

1998年のWHOの意見書において治療法の呼称を「アレルギー免疫療法」に、治療用アレルギーの呼称を「アレルギーワクチン」とすることが提唱された。日本における販売名は、ワクチンではなく「標準化アレルギーエキス」である。（日本では標準化アレルギーエキスという呼び方にしたのは、アレルギーがワクチンになるはずはない

と判断できる賢い日本の医者がいたからでしょうか?)

日本では漆器職人など漆を扱う職業の親方が、徒弟の舌下に少量の漆を置いて少しずつ量を増やす事で漆アレルギーを起し難くさせる、という事が経験則から慣習的に行われていた。(これが私がいつも言っている、自然後天的免疫寛容を起こしてしまうということであり、漆の成分とさえも最後には共存できるという極めて貴重な経験例であります。同じぐらいに貴重な例は、養蜂家が蜂に刺されてもいつの間にか蜂の毒に対してアレルギー反応を起こさなくなってしまう話も既に何回か書いたことがあります。)

1873年、イギリスの Charles H. Blackley は、『枯草熱あるいは枯草喘息の病因の実験的研究』で、当時"hay fever"または"hay asthma"と呼ばれる、季節性の呼吸器疾患が花粉と関連していることを示した。これはアレルギー疾患と、そのアレルゲンとの関係性を示した最初の学術論文の一つといわれている。(実はこの枯草熱というアレルギーも花粉が起こした訳ではないのです。皆さんご存知のように、産業革命が始まったのはイギリスであります。1760年代のイギリスに始まり、1830年代以降、ヨーロッパ諸国に徐々に波及していきました。それまでの小さな手工業的なものから、機械的な大工場が作り上げられ、エネルギー源として石炭などを大量に用いた大工場からの排煙などに含まれる有害物質などによって徐々に大気が汚されていきました。石炭などが不完全燃焼して生じる煤や煙の中に二酸化硫黄や窒素酸化物を含む微細な煤煙が大気を汚していったのです。今中国で問題となっている PM2.5 と同じような微粒子が花粉にひっついてアレルゲンとなったのです。この微粒子がハプテンとなり、花粉がキャリアタンパクとなって 1873年の頃には“hey fever”と呼ばれるアレルギー性結膜炎やアレルギー性鼻炎やアレルギー性気管支喘息が生じ始めたのです。現代はアレルギーの時代や膠原病の時代といわれますが、その始まりは産業革命によって生み出された様々な化学物質が原因であったのです。産業革命以前は天然の異物に対するアレルギーはあったのですが、極めて数少なかったのです。それ以後、人類は 7500 万種類の化学物質を作り出し、今なお 1 日に 15000 種類の便利な化学物質を作り出し、人間の生活が豊かになったと喜んでいるのです。豊かにしてくれた化学物質が人体を蝕んでいることを認めようとしません。アレルギーや膠原病の原因は全て化学物質であるということを絶対に認めようとしません。認めてしまえば人類が発展と豊かさと幸せをもたらしたという現代文明を否定せざるをえないからです。残念です。)

1911年、ロンドンのセント・メリー病院予防注射科の医師 L. Noon は『枯草熱に対する予防接種』を発表した。これは、hay fever に対する未知の花粉に含まれる毒素に対して抗毒素を検討し発表したものであり、減感作療法の試みの起源であるという。(1911年といえども、免疫学が今ほど進んではいませんでした。だからこそアレルゲ

ンに対して予防接種を行うというアホな論文が発表されたのです。このアホな考え方の延長が減感作療法というアレルギーワクチン接種に繋がったのです。)

1900年代初頭は、1888年にフランスのパスツール研究所で開発されたジフテリア抗毒素に始まるトキソイドやワクチンの研究が盛んだった時期である。減感作療法もこのパラダイムの中から派生した、当時の先端医療研究の一つといえる。抗生物質が医療研究のパラダイムとなるのは1940年代以降である。(ワクチンは感染症のために価値あるものですが、アレルギーに対しては全く意味がないことは既に説明しました。)

1943年、アメリカのM.H.Lovelessは減感作療法の研究で、血清中に**阻止抗体**(そして、**blocking antibody**)とよばれる、特定の他の抗体に対して阻害的に働く抗体を発見した。一方で、鼻粘膜におけるIgGの量は変化がないことから、この遮断抗体の関与は疑問とする意見もある。(IgGにはIgG₁、IgG₂、IgG₃、IgG₄の4種類があります。この遮断抗体という意味は、アレルギーを起こすIgEと結びつく前に、IgGにアレルギーがひっついていてという意味です。Lovelessが行った減感作療法の研究が行われた1943年には、アレルギー抗体であるIgE抗体は発見されていませんでした。日本の石坂公成が抗体を発見したのは1967年のことであり、その功績でノーベル医学賞の候補になったのですが、残念ながら受賞できませんでした。従ってLovelessはアレルギーがまずIgGに付着しているという意味で、4つのIgGの全てが実はIgEにアレルギーをひっつかせないという遮断抗体であるということを彼は何も理解していなかったのです。本庶佑がIgGがIgEにクラススイッチを行う遺伝子を見つけたのは1980年代なかばであります。このクラススイッチの遺伝子の発見により、IgGからIgEに抗体がクラススイッチしていない間は、このIgGは全て遮断抗体といえるのです。こんな事実をLovelessが知っていた訳はありません。従って、遮断抗体という概念自身が全く意味のない概念であるのです。さらにIgGをIgEに変えない限り膠原病が続く訳ですから、遮断抗体を作り続けることは、膠原病が永遠に治らないということを皆さんご存知ですね。遮断抗体を作ることはアレルギーよりももっと重篤である膠原病を作ることになるということを、減感作療法をやっている医者は何も知らないのです。残念です。)

治療

花粉症に対し効果を実感するのは治療開始2~4ヶ月後であり、花粉症情報レベルが低い時期から始める。3年目で効果が最大となる。アレルギー免疫療法が成功した後は、長期のアレルギー防止効果が見られ、それは3~5年かそれ以上になる。アレルギー症状が再発したり、治療したアレルギーとは別のアレルギーに感作した場合は再びアレルギー免疫療法をやり直すことができる。

皮下投与では治療用標準化アレルゲン抽出エキスを皮下注射器で投与する。通常は上腕内側の肩と肘の中間のたるみのある皮膚組織に行く。局部の不快感などを軽減するために、皮下投与の数時間前に抗ヒスタミン剤の服用を勧める場合がある。

極めて低い投与量から開始し、定期的（通常週1～2回）投与ごとに徐々に増量し、維持投与量に達する。維持投与量到達には通常4～6ヶ月を要する。その後投与間隔は隔週～隔月となり、通常は数年間継続する。舌下投与は皮下投与に比べて安全・効果的・在宅治療が可能であり、少なくとも最初の季節の内に治療効果は現れるという。緩やかな増量は必要無く、通常初回投与から臨床投与量が与えられる。ヨーロッパなど、いくつかの国では経口投与剤や舌下錠など（舌下減感作療法）が伝統的かつ普遍的に行われている[要出典]。高投与量の舌下投与をプラセボ使用二重盲検法で調査したヨーロッパでの結果では有効性が認められているものの、舌下投与は米国では認可されていない[要出典]。米国では少数の耳鼻科開業医で皮下投与の他の選択肢として舌下投与が行われる。日本では保険適用外（自費診療）。（これだけたくさんの化学物質が大気に散布されているので、花粉と結びつく化学物質も無限大といえます。従って、アレルゲンのエキスを投与するのは1種類だけではありません。しかもシーズンによって花粉が飛ぶ季節も変わるので、その度にアレルゲンエキスを変える必要があります。私は数多くの減感作療法を行ってきた患者さんを診ましたが、2～3年どころか5年やっても花粉症が治らないという患者さんばかりです。現代の医療は免疫を抑える限りは全て無駄な医療ではありますが、理論も曖昧であり、かつ時間とお金と労力が必要な減感作療法も全く無駄な治療といえるでしょう。既にアレルゲンが入ってそれを排除しようとするための免疫の働きによる症状が出ているにもかかわらず、さらにアレルゲンを加えるということは苦痛以外の何者でもありません。

花粉症もアトピーも喘息も同じ病気ですが、なぜ花粉症だけに減感作療法だけが行われ、アトピーや喘息に対してはアレルゲンワクチン治療が行われないのでしょうか？これに対する答えもどこにも書かれていません。花粉症などというのは、実は極めて簡単に症状が取れるのです。皆さんご存知のように、近頃はアレルギーマスクが作られています。空気は行き来しますが、花粉が入らないほどの密な編み目を残したマスクがよく売られています。花粉症によるアレルギー性結膜炎を防ぐためにアレルギーゴーグルも大売れです。もちろん漢方煎剤によってアレルゲンと戦う場所が狭い目の結膜や鼻の粘膜症状は簡単に消え去ってしまいます。もちろんそれまでにステロイドのスプレーや点眼薬を使っていないという条件が必要ですが、ステロイドを使った人は必ず医原病であるリバウンド症状がしつこく出続けるからです。）

今日はここまでです。2014/06/05